

# ひとを 理解するとは、 自分を壊すこと



## 理解することの暴力性

—「断片的なものの社会学」※1の  
あとがきに、この本を書かれた趣旨  
が、「人を尊重することによってな  
かなか人に近づけない」と書かれてあ  
ったことが気になりました。

—そういう時代の雰囲気があるよ  
うなことです。

—それでも、なんとか人を理解し  
たい。

—理解できなくても話を交わす。

—私がやっている生活史調査という  
のは生い立ちから人生を順番に聞いて  
いって、社会学の理論につなげて人の  
生を考えることをしているんです。イン  
タビューで人の人生を聞くということ

は、その人の人生を深く理解するよ  
うに思われていて、私たちもそういうふう  
にやっている部分もあるんですけど…

—初対面の人に話を聞いて、何がわか  
るかってわからないですよ。二時間とか  
ではごく一部のことしか聞けないん  
ですよ。でも、たった二時間の話から、  
でも、いろんな言葉が生まれてきて、そ  
こからいろんなことを知ることができ  
る。だから、誤解をよくされるんですけ  
ど、生活史を聞くとか他者の人生とか  
人格をよく理解できるよっていうこと  
じゃなくて、たまたま会った人に話を  
聞くとすごくおもしろい。これはいつた  
い、なんだろうなって思いながらやって  
ます。

—インタビューされた後、あるテーマ  
をもって研究成果をまとめられる。  
そこから切り捨てられ反映されな  
かった話が、この本に載っているとい  
うことですか。

—そんなに簡単ではないんです。は  
じめに会った人に話を聞くのは、ものす  
くおもしろい。何がおもしろいのか  
言うとおもしろい。エピソードの中  
で話されていること、その場で起こっ

社会学者の岸政彦さんは

沖繩を研究しようと思ったとき、

沖繩はマジヨリテイの神話で

できていることに気づいた。

マジヨリテイである自分が、その囚われの中

どうして抜け出せばいいのか、と悩んだ。

出てきた答えは、

ささやかな出来事も聞き逃さず、

地元の人々の声を聞き、自分の感性で

とらえたことを結びなおすことだった。

それは、岸さんにとって

少しずつ自分を壊す行為でもあった。

—ることがおもしろいんです。もちろ  
ん、社会学者なので、特定の社会問題に  
ついて調査研究して、データを分析する  
ということが、私たちの主な仕事です。  
分析できないような微細な、印象的  
なディテールと、理論的に分析する社  
会学。この二つはまったく別物と捉え  
られていたんですが、全然矛盾しない、実  
はひとつのことだということが言いた  
かったんです。たまたま拾った石ころを  
ずっと見ていたとか、子どものころの些  
細な記憶とか、日常的に人と接してい  
て、印象的な出来事とか…。人に会う

里見喜久夫 (『コトノネ』編集部) = インタビュー  
interview by Kikuo Satomi  
武田 徹 = 写真  
photograph by Toru Takeda